

“楽園” ブームの “侵略者”

唐木健仁

沖縄病

スキューバダイビングを始めてもう 20 年以上になる。アルバイトしてお金を貯め、高校 2 年生の夏にダイバーとして、水中の世界に足を踏み入れてから、大きな事故もなく、夏は越前海岸、秋から春は伊豆半島や紀伊半島で潜り続けている。

沖縄との出会いも、やはりダイビングであった。初めて沖縄に行くことになった日の朝、興奮で鼻血を出し、ティッシュを鼻につめたまま空港まで行った記憶は今でも鮮明に覚えている。最終目的地は沖縄県で 2 番目に大きな島である西表島だった。名古屋から那覇は全日空、那覇から石垣は、今は無き南西航空、石垣からは船で西表島へと移動した。空気、植物、言葉、人々の顔などなど、何もかもが、名古屋生まれ、名古屋育ちの私にとっては「異国」であった。それ以来、何度も沖縄に通う、いわゆる「沖縄病」を患っている。

ここ 10 年位は水中写真にもかなりのめり込んでいる。ダイビングの機材ですら 20kg を超えるのに、多いときは 3 台の水中カメラとストロボ機材を持つため、総機材重量は 40kg を越えることもある。

写真の中に、他のダイバーの排気バブルといった人工的なものが写りこむことを嫌う私は、ダイビングの大原則に反するが、大抵の場合、1 人で潜っている。傍から見

たらちょっと異様な光景で、海外で潜っていると、日本人ダイバーは、ちょっとオタクっぽいヘンな人を見るかのように、遠巻きで私を見る。

海の中の環境破壊

水中写真を撮っていると海中の急速な環境破壊が目につく。沖縄本島沿岸のサンゴは言うにおよばず、宮古島の沖合いにある巨



3 年前の八重干瀬の枝サンゴ

大サンゴ礁の「八重干瀬」でも壊滅的被害を受けている。ダイバーとしては悲しい限りである。サンゴ礁の死滅は、そこを棲家としていた小魚減少につながり、小魚の減少は、それを餌とする魚の減少につながっている。沖縄の人々にとって、海は幸せを運んでくる豊穡の象徴であり、ニライカナイ信仰の象徴でもあり、大問題である。

このような事態を招いた原因には世界的に問題になっている地球温暖化が第一に挙げられるが、それに加えて、安室奈美恵が活躍した1990年頃からの沖縄ブームによる観光客の急激な増加による海洋汚染もあるのではないかと私は考えている。サンオイルの類をつけて海に入る、サンゴの上に立つ、リゾートホテルの巨大化、不自然に公園化された海浜、港湾拡大の工事などなど観光という視点で環境破壊の要因を挙げれば限りがない。

伝統文化への観光の影響

観光客増加の影響は当然、沖縄文化へも波及している。リゾートホテルのディナーショーやロビーなどのアトラクションとして、観光客は琉球舞踊や民謡など「沖縄らしい芸能」をよく目にする。それらの芸能のなかで最近特に注目を浴びているのが「エイサー」である。

沖縄本島中部地区で盛んに行われており、地元の青年会によって、7月から8月を中心に踊られている。40～50人で隊列を組み、太鼓を打ち鳴らしながら踊る様は圧巻である。特に、「エイサーの街宣言」をしている



お盆でのエイサーの町内巡回

沖縄市は、青年会によるエイサーが盛んであり、年1回、旧盆の翌週末に「全島エイサーまつり」を3日間開催し、沖縄のみならず本土からも多くの観光客を確保している。

ホテルで演舞されるエイサーは、多くの場合、観光客用にアレンジしたエイサーを、アトラクション用に編成された演者が踊るものであり、エイサーの本来の姿とは異なる。また、「全島エイサーまつり」で演舞されるエイサーも、青年会の成員が演舞しているのではあるが、自治区内の各家々を巡回しながら演舞するという本来のエイサーとは異なり、総合運動場で観客に「見せる」劇場型エイサーとなっている。

「地域」の芸能から、観光客を意識した「見せる」芸能に変化したエイサーは、観光客の増加にともない、1990年頃から、沖縄県内だけではなく、東京、横浜、名古屋、大阪などの首都圏でも徐々に演舞されるようになった。また、これらのエイサーが盛んになった本土の都市は、戦前の早い時期から、沖縄県からの転入が多い地域でもある。

愛知県のエイサーと「沖縄」

エイサー本土拡散の背景には、沖縄ブームに加えて、沖縄出身者が形成する県人会などの存在が大きい。修士論文の調査地として選んだ愛知県の沖縄県人会の事例を挙げると、愛知県の沖縄県人会は1990年頃から県人会の会員資格を沖縄出身者にこだわらない「沖縄好きなヤマトーンチュ」も登録可能とし、芸能の島・沖縄をPRしながら、グループとしての規模を拡大してきた。現在では2000人を超す会員登録数を誇り、全国でも最大級の県人会組織である。

愛知県内の10以上もあるエイサー団体は県人会組織との連携を密にして活動している。県人会はエイサー団体の活動を支援

し、エイサー団体も県人会活動の実働部隊として協力している。エイサー団体の人的協力がなければ、県人会活動が制限されてしまうという最近の状況は、観光によって拡散した芸能が、愛知県の沖縄系「エスニック・グループ」にも影響を与えていると言える。

また、愛知県内のエイサー活動を、文化的他者へのメッセージという視点から考えると、沖縄県内の観光における文化伝達と同じ構図が見えてくる。

愛知県内の沖縄県人会主催の「あいち沖縄まつり」を見に来た人々は、沖縄県出身の若者が中心となり、沖縄を想って、沖縄の伝統的な芸能をしているというイメージを持つかもしれない。しかし、エイサー団



あいち沖縄まつり

体の多くのメンバーは、沖縄に出自を持たないヤマトーンチュである。そのため、沖縄県内の観光施設で、観光客に喜んでもらう為にアレンジされた演舞と本質的にはあまり違いがなく、享受しやすいエッセンスだけを抽出した「創作伝統芸能」という見方もできる。

大阪のエイサー、日本人は侵略者？

ところが、大阪市大正区には、愛知県の事例のように、エイサーが「ヤマトーンチュのための芸能」になっていくことに批判的な考えを持ち、沖縄県出身者の為のエイサーであるべき、と考えるグループもいる。そのグループの代表者に、「沖縄文化が商品化されている傾向があると思うのですが？」と尋ねた際に、「そんなことは日本人に言われたくない」と怒られた時には、正直驚いた。私は「日本人」で、彼は「沖縄人」という認識なのである。また、同じグループの別の人は、沖縄に移住する「日本人」は「侵略者」に見えるという。「日本人」が沖縄に行くことによって、「沖縄人」の仕事が奪われて、仕方なく島を離れ、家族と別れて出稼ぎに来なければいけない状況になってしまうのだという。少々、極端な考えのような気もするが、エイサーをやる「日本人」は沖縄文化の、沖縄に移住する「日本人」は労働市場の「侵略者」という位置付けのようである。

しかし、その大阪のグループ代表者も、オキナワブームの流れのなかで悩んでいるのであった。1975年の発足当時、メンバー全てが沖縄出身の青年であったが、現在では半数が、いわゆる「日本人」である。大阪

における沖縄出身者への差別、沖縄における基地問題、米兵による犯罪など、「楽園」ではない沖縄を教え、ともに沖縄問題を考えたいというグループ代表者の思いは、「日本人」には通じていないのが現状である。

「沖縄」との共生

愛知県の沖縄県人会のように、組織の中に積極的に沖縄県人以外のメンバーを招き入れて「楽しい沖縄」というイメージで連携していくことも、大阪市大正区のグループのように、沖縄の抱える様々な問題を提起し「楽しくない沖縄」を共有することで理解を深めることも、「共生」の異なるスタイルであるといえよう。同じ沖縄出身者のローカルな「エスニック・グループ」でありながら、転居した地域の歴史的経緯、労働環境、居住環境、差別意識などの違いが「エスニック・グループ」の特性に大きな影響を与え、「共生」スタイルの地域性の要因となっていることは非常に興味深い。

「共生」問題に直面しているのは、本土の沖縄系「エスニック・グループ」だけではない。「美しい海」「健康・長寿の島」「癒しの島」という「楽園イメージ」を前面に打ち出すマスコミや観光のPRによって、沖縄を訪れる人はこれからも益々増えていく。さらには沖縄移住を決意して訪れる人も少なくない。

年間500万人を超す観光客や沖縄移住者希望者が「侵略者」と称されることなく、どのように「共生」するかは、ゲスト側とホスト側の双方の大きな課題といえる。

著者プロフィール

唐木健仁 (KARAKI Kenji) 国際文化研究科博士後期課程院生

愛知県立大学大学院国際文化研究科博士前期課程を経て、今年から博士後期課程進学し、稲村先生の下でエスニシティについての文化人類学的研究をしています。修士論文では、沖縄伝統芸能といわれる「エイサー」に注目し、エイサーを中心に広がりを見せる沖縄系「エスニック・グループ」の地域性を名古屋と大阪をフィールドとして、エスニシティの地域性と変容について研究してきました。前期課程の2年間は「エイ



ハワイ沖縄連合会理事 Wayne T. Miyahira 氏とハワイ沖縄センターにて

サー」だけに注目して沖縄コミュニティを考察してきた感があります。そこで、後期課程では、視野の幅を広げる為に、古典芸能に位置づけられる「三線」や「琉球舞踊」などにも注目したいと思っています。古典芸能界には階層性が存在するため、古典芸能のグループは、同好会的要素の強いエイサー・グループと異なり、特有の沖縄コミュニティを形成しているのではないかと考えています。また、古典芸能を加えることで、海外の沖縄県人会におけるエスニシティ研究の足掛かりになるのではないかと考えています。

大学院生でもあるが、「柔道整復師 (ほねつぎ)」という一面をもち、すきま産業的に地域医療に貢献していると本人だけは思っています。接骨院を開業しておりますが、私が大学院生であると患者さんにお話すると、決まって「仕事に関連する研究をしているのですか?」と聞かれます。「いえいえ、沖縄について研究しています」と答えると、皆さん不思議な顔をなさいます。患者さんの期待を裏切って、あまり仕事の役に立たない研究を続けていますが、沖縄が好きなので止められません。

プロフィールに乗せる業績がないので、「柔道整復師」について少しお話しさせていただきます。柔道整復師になるには、大学もしくは専門学校を修了して国家試験の受験資格を得、国家試験に合格すると柔道整復師免許を取得することができます。主な勤務先は、整形外科、接骨院 (整骨院)、スポーツトレーナーなどで、最近では介護福祉施設などでも活躍しているようです。よく、整体院やカイロプラクティック治療院などと混同されますが、医師、歯科医師などと同様に、急性期、亜急性期の骨折、脱臼、捻挫、打撲、挫傷に対する治療という業務範囲内において、健康保険の適用があるという点が大きな違いです。必要なときにご相談いただければ幸いです。